

あての同氏の年賀状を発見した。どういふ人か、と問いただすと、戦後の混乱期に、所蔵本を店に持ち込んで、買い取った常連客だったとか。私は驚いて、すぐに、住所の判明した同氏に、20年後の礼状を出した。もちろん長場先生は私を覚えていなかったが、その返事は、感謝に満ちた印象的な文だった。

これらの話は、わけのわからない時代から、池上先生の蜘蛛の巣の上で、私の体があやつられていたかのような、不思議な現象である。

天の川に咲くハスの花の上で、尾崎先生と池上先生は、この私をどのように見ているのだろうか。お会いする機会は今分らないことを願っているが、厳しい目をしているかもしれない、時が解決するかもしれない、ややなげやりに、しかし、あきらめず、目先の強敵たちをかたづけて、将来に期待しながら生きたい。尾崎先生との、無言のままに握った手の感触は忘れない。(2005. 7. 14)

尾崎富衛先生と私

石 沢 進

○先生との出会い

人生の岐路または人生の方向転換の時に尾崎先生と行動を共にしました。当時、私は農学部在職中で園芸関係の研究に集中するか、野外の植物に関連した研究を選ぶか、迷っていた時でした。その時期に池上先生・尾崎先生に同行して、長野県から山梨県の境に聳える北岳への採集旅行に出かけました。

一日の献立：米、スルメ一枚、缶詰一缶、たまねぎ、味噌持参での3人旅、山頂でのビバークで手持ちの水を消費してやっとの思いで下山しました。その山旅がやみつきになり、研究室にいるよりは、野外に足を運ぶ機会が多くなり、結果的には、農学部から理学部への配置替えとなり、その後は野外の植物の観察に集中するようになりました。尾崎先生のご指導の賜物と思っています。

○自動車による採集旅行

運転免許を取得してから間もなく、初の強行旅行に出立しました。一泊二日、奥胎内の悪道に挑戦しました。当時は、砂利敷きでカーブが多く、狭くて急な崖の下を通る危険極まる道でした。行きは狭い道の入り口でテントで泊まったので、早朝からその悪道を遡って奥胎内の終点まで無事に到着したが、帰りは日暮れ前に脱出しないと、危険であると思っていました。しかし、同行者の池上先生は、日が照って明るい間、野外の観察を中止しないことが多かったため、尾崎先生を始め、牧野恭次氏、坪谷富男氏、私と

早めの脱出を勧めて日暮れ直前に胎内溪谷を後にしました。新潟に到着はかなり遅い時間となったはずですが。

○尾崎先生の特技・特徴

尾崎先生は、普段心豊かで穏やかであり、極めて穏健な感じでした。しかしながら、ハンドルを握ると、人が変わったように高速運転で走行するので、大変驚いたと多くの同乗者が共通した印象でした。現地観察会の後、尾崎先生は一足遅れてスタートしたはずなのに、高速道路で追い抜かれることもありました。

眠りに関して効率よい特技があり、登山の途中で一休みの時、テント場で夕食の準備中に石に腰掛けている瞬間に、コックリ、コックリと居眠りをされ、短時間で目を覚まして、また行動されることもしばしばでした。

テント泊まりの夜には、ハーモニカの伴奏でロマンチックな曲を演奏されて、心の和む一時を与えて頂きました。

植物調査を共同で行う際に、同行者に大変な気配りで中心的な役割を果たして、福島潟の植物、佐潟の植物、鳥屋野潟の植物、津南の植物など各地の調査報告を完成させました。

○植物同好じねんじょ会 顧問

多くの会員に親切な指導をして頂き、また、調査のまとめなどで責任の多い役割分担を指示して会員の向上に努めて頂きました。会合の度ごとに差し入れを持参し、会員を元気づけて頂きました。

じねんじょ会の成果として20年間にわたる「新潟県植物分布図集」の刊行があり、その推進にあたり多大なご援助を頂きました。先生の後押しがなければ、この刊行は途中で挫折せざるを得なかったと思います。じねんじょ会のこのような業績により、松下幸之助花の万博記念賞の奨励賞を受賞できたのも顧問として会を支えて頂いた賜物と感謝しています。

○カエデとの付き合い一生 集大成

尾崎先生といえば紅葉、紅葉といえば尾崎先生とカエデに関する資料収集に努力されて様々な成果をあげてくれました。その集大成をじねんじょ会員の目標の見本として完成して頂きたい、とお願いしてきました。先生もそのつもりで努力されていましたが、日の目を見ないで終わったことが大変残念です。

カエデをめぐる情報の一部は「新潟県植物保護」の第30号(2001)に掲載して頂いています。

○海外旅行と写真

尾崎先生は退職後、県内の植物調査の外に、精力を注がれたのが海外旅行と写真撮影にあったように思います。海

外旅行は、1987年以降、35回にわたり、世界各地に足を運ばれたことは、最近知り、驚きました。写真の分野では、県展でたびたび入賞されたことは、新聞紙上で見ていましたが、その詳しい状況を入手していません。尾崎先生には、次々とたゆまない新たな挑戦をなされていたようです。



奥胎内の採集旅行
尾崎先生(左)、牧野恭次氏・池上先生(中央)、坪谷富男氏(右)
(1961. 11. 19)

○先生の魅力と最大の教え

病気で倒れるという逆境にあっても、前向きな姿勢と笑顔で接しておられた先生には敬服の至りです。生きることへの情熱の現れと思い、また、最大の教えと感謝しています。

上記のことは、告別式(2004 3 18)で、先生とのお別れの際に述べた内容に若干追加しました。

改めて長い間のご指導にお礼申し上げ、先生のご冥福をお祈りすると共に、残された奥様と御親族の方々の御多幸を祈念いたします。